

# 万葉の歌学

橋本達雄

1

歌学とは広く言えば和歌に関するすべての研究を包括するものであるが、一般には和歌の本質や意義などを明らかにする歌論を指しているとしてよいだろう。本稿でもその意味に解することにする。しかし、いうまでもなく万葉集は歌論書ではなく序文もないのでまとまった論が展開されているわけではない。そうした歌論が初めて現われるのは宝亀三年（七三三）、藤原浜成の『歌経標式』まで下るのであって、さらに『古今集』両序に至ってはじめて本格的な歌論が誕生すると言われている。事実はその通りであるが、万葉集という一つの歌集を編纂すること自体、すでに歌とはいかなるものかとする認識をもち、目的意識をもって取捨選択し配列する営為と解されるので、底にかなり明瞭な歌学が据えられていたとさえざるを得ない。その最初の企てはおそらく持統朝まで溯ると見られるので、万葉の歌学もこの辺に萌芽していることを予め推測できるのである。ではその歌学はいかなるものであり、いかに深められていったのか。歌論書でない万葉にその歌学を探るには、これまで多くの先学が試みたように、分類のされ方、題詞・左注など作歌事情を記し

た文章がもっとも手掛りを得やすい、ここでもそれに習い、実作ともかかわらせつつ考察してゆきたい。

2

はじめに分類についてみるに、内容と表現上の分類がある（歌体上の分類もあるが、今は省略する）。内容の分類は三大部立として雑歌・相聞・挽歌がある。この三つに分けるという着想の根底に毛詩大序の風・雅・頌が踏まえられているだろうとする見解は、尾山篤二郎、伊藤博両氏などに見られるところで、<sup>(注1)</sup>内容的には大きくくい違ふものの、毛詩の雅が雑歌に、頌が挽歌に、風が相聞と相わたる面のある点および当代の万葉人が参考にしうる文献で毛詩ほど巻一・二の構成に類似するものを見ない点などを考慮する伊藤氏の見方は多分妥当なのであろう。しかしこれをそのまま襲用しなかったのはわが国の和歌の性格が異なるところにもよろうが、万葉人独自の歌学があったとすべく、和歌の実態に即した分類名を模索しつつ『文選』の部立その他を勘案して定めたのであった。三部立の名称の由来については雑歌・挽歌が『文選』に基づくことが、いささかの異見はあるが通説化している。相聞については『文選』の分類

になく、漢以来隋唐にわたる通用語として広く使用されていた語で、山田孝雄氏によれば、「されば相聞の熟字は之を用にしていへば、消息を通じ意を交換する義にして、これを体にしていへば、往来の信書の義たるなり、而してその用をあらはすが本義にして体となれるは転義なること明かなり。」<sup>(注2)</sup>ということになるが、これが部立の一つとして採用されたのは、同じく山田によれば、書道における一種の文体名として「最も耳目に親しかりしが為なるを思ふべきなり」としている。これによれば相聞は書道上の分類名として通用していたものごとく、そこでその性格が「万葉の變の文学たる相聞短歌を総括するに適しい分類だつた」として移植したということにもなるうか。もっとも『文選』の部立には「書」の文体があり、これは「相聞」の文体であるところから「書」を「相聞」に置きかえることが常識化していたであろうとし、「書」の分類に着目してこれを「相聞」とし、雑歌や挽歌と同じ地位に引き上げたものとする小島憲之氏の見解もある。<sup>(注4)</sup>

雑歌・挽歌にしてもただ『文選』にあるからといって安易に横すべりさせたものでないことは相互間に分類の「目」としての異質性があることから考えうるところであり、相聞の獨創性とも相俟って、万葉人の見識を示すものといつてよからう。それにしても三部立は割り切つていえば愛と死の歌を除く他を雑に包括せしめるといふ、もつとも単純・素朴な分類法であることは否めなく、これは小規模な巻一・二原形部の成り立ちと関わるのではないかと思われる。以後万葉集が成長してゆくにつれ、さまざまな分類も施され、分類意識も多角的に細分化するが、基本的な三部立は巻一・二を規範として順守されてゆくのである。

次に表現上の分類として注意されるのが、正述心緒・寄物陳思・譬喩歌の三分類である。上の二つは巻十一・十二に見られ、譬喩歌は巻三・七・十ほか三巻に出る。このうち巻十の譬喩歌二首（八六六・八九六）が雑歌であるはかはずべて内容的には相聞で、それを表現の型によつて三分類したものである。これはあたかも毛詩大序の賦・比・興に当る。賦は事物をありのまま直叙するもので正述心緒に相当すると見るのに異論なく、比と興については中国でも古くから説のあるところで、ともに間接的・婉曲な表現であるが、比が事柄（外物）のみを言つて間接に恋情を表現する譬喩歌に、興が事柄（外物）を媒材として、これに寄せて恋情を表わす寄物陳思に該当するであろうことは、中島光風氏の説以来ほぼ認められているところである。もっとも比を明喩、興を隱喩と解すると、比が寄物陳思、興が譬喩歌となつて二者は逆になるが、いずれにしても六義の三表現の型を念頭に案出された分類であることに変りはない。ただ毛詩の場合はすべての詩の表現形式であるのに対し、これは相聞のみに関するものである点に独自性があることになる。しかし、正述心緒・寄物陳思などの分類は中国の文献に原拠が求められず、これが何に基づいて案出されたものかは不明であるが、毛詩の六義はもとより知つていたとしても、それよりも直接には鍾嶸の『詩品』にもとづくのではないかとする中西進氏の説がある。<sup>(注7)</sup> 周知のようにその序には六義に触れず直ちに、

故詩有三義焉、一曰興、二曰比、三曰賦、

とあつて、「この取扱ひこそ、寄物陳思・譬喩歌・正述心緒に適合する」のであり、続く「文已尽、而意有餘興也」（譬喩歌）「因物喩比也」（寄物陳思）「直書其事、寓言寫物、賦也」（正述心緒）

の文もその考え方に近いとするのである。ほかに孔疏によったとする太田青丘氏の説もあってその可能性もあるが、『詩品序』の方がより近いようである。

そうだとすればこの序は太田氏の研究などにより古今集の序に大きな影響を与えているとされ、通説化していることからすれば、すでに万葉のこの時代において、わが国で初めての本格的歌論とされる古今集序に近い和歌観を抱いていた者のあったことを予測させるのである。しかも「思いを陳ぶ」といい「心緒を述べ」というごとき、和歌が心を抒べるものとする意識が明瞭に看取され、抒情詩としての和歌の本質や表現機能を自覚していたことをかなり強く示唆するのである。

ではかかる和歌観や自覚は長い万葉時代のいつ頃獲得されたのであろうか。この点を考えるに当って瞠目すべきは近年の伊藤博氏の研究成果である。述べるまでもなく巻十一や十二の人麻呂歌集所出歌は正述心緒・寄物陳思の分類が施されているが、中核をなす巻十一寄物陳思の分類配列は続く作者未詳や巻十二の寄物陳思の配列と異なり独自のものであること、正述心緒の配列も他の正述心緒とは異質の孤立性と独自性が見出されることから、これらがともに原人麻呂歌集以来のものであること、それが人麻呂によって命名され、類聚配列されたことをきわめて克明に論証し、人麻呂は『詩品』の「因物喩志」から寄物陳思を「直書其事」から正述心緒を導かれたのであろうとしたことである。

古くから指摘されているように人麻呂歌集の寄物陳思は神祇部・天地部・人工物部に分けられ、物によって類聚し配列されている。これはその配列がそのまま歌の検索に便を与えることで、人麻呂歌

集が相聞歌制作の規範となる一種の類書のごときものであったことを物語るものであった。伊藤氏もまた作歌の教科書的意味をもつ社会的権威であったと個人歌集の意味に触れて述べている。わが国の歌学は山田孝雄氏がその歴史を通観しつつ繰返し強調しているように、歌学びの為のものであり、模範とするに足るすぐれた歌を掲げて示し、理論は簡略にして例歌として秀逸の模範を求めることにもっとも力を注いできたという伝統があった。純理論的な歌論書は乏しく、山田のあげる貫之の新撰和歌、忠岑の和歌体十種、公任の金玉集・十五番歌合・三十六人撰・深窓秘抄、俊成の古来風体抄、定家の秀歌体大略・近代秀歌などはいずれもこの伝統に立つものであった。したがってかかるわが歌学の源流はやや性格を異にするとはいえ、当然人麻呂にまで溯るものというべく、その後の金村歌集・虫麻呂歌集・福麻呂歌集などにも同様な性格を見るべきであろう。人麻呂歌集正述心緒は物による配列をとっていないのはっきりしたことは不明だが、これも何らかの基準によることは予想されるのであって、これまた寄物陳思と同様に作歌の規範であったことには変りがない。

人麻呂歌集について、さらに注意されることは、いわゆる非略体歌集について季節分類が施されていたと思われることである。その最初の指摘は巻八・十の四季分類にふれた石井庄司氏の発言であるが、これを具体的にし、巻九にまで拡大した武田祐吉氏があり、さらにこれらを継承しつつ巻九・十について詳細・緻密な論を展開したのが渡瀬昌忠氏であって、その所説はほぼ従うことができると思われる。人麻呂が季節感にきわめて敏感な作品を多く残していることは泣血哀慟歌や吉備津采女挽歌などの例をあげるまでもなく定評の

あるところであり、すでにしつかりした四季観のあったことが確認される。<sup>(注18)</sup>これは高橋和巳氏が「情詩にせよ雑詩にせよ、人間の事象を、自然の代謝に依りて歌うのは、西晉諸詩人に共通する方法である。」<sup>(注17)</sup>と言われているごとく、六朝の詩文から学びとったものと考えられるが、折から持統四年(655)に正式施行を見た元嘉曆と儀鳳曆の普及とも相まって確乎たるものとなったということができよう。

『文心雕龍』では「物色」の一章を設け、自然と文学との關係を春秋、代謝、陰陽、慘舒、物色、之動、心、亦、播、焉、蓋、陽、氣、萌、而、玄、駒、步、陰、律、凝、而、丹、鳥、羞、微、虫、猶、或、入、感、四、時、之、動、物、深、矣、云々

と述べ、『詩品序』もまた、

若乃春風春鳥。秋月秋蟬。夏雲暑雨。冬月祁寒。斯四候之

感、諸詩者也。云々

といい、四季の自然の風物が詩的感興を催す大きなものであることを述べている。これらの詩論も多分人麻呂は知っていたと思われるが、そうだとすれば非略体歌群の季節分類が人麻呂によって創始されたゆえんもきわめて自然に納得される。これを一步進めたのが巻八・十に見られる雑歌と相聞を各季節に分類した八部立である。この季節による部立について太田青丘氏は、単なる一部門とし春日、夏日などの目を設けることはあっても、四季による分類を中心とするものは中国においては例を見ないといいい、わが国と中国の自然および自然への対し方の差に言及している。『玉台新詠』巻十に春歌以下冬歌の小分類のあることからして、これに示唆を得たとする宮崎晴美氏の見解もあつて参考になるが、これとて万葉の場合とは比較にならないほどの小分類に過ぎない。わが国では古今集以下の勅撰

集において四季歌がもっとも中心の部立となることは述べるまでもないが、勅撰集が季節の推移に従つて緻密な配列をとるのに対し、万葉は巻八を年代順、巻十を詠物寄物・によって配列しているなどかなりの相違があるので、万葉の四季分類が直接影響を与えたかどうかは直ちに言い得ないにして、かかる大がかりな分類を、はじめ「続万葉集」と称した古今集の撰者が知らなかったはずはなく、配列方法を異にするとはいへ、その先驅をなす意味と獨創性は高く評価できよう。巻八・十の部立の考案者は不明だが、家持あるいは周辺の人物に比定されるものごとく、誰であつたにしても、その源流が人麻呂にまで溯ることは間違ひなからう。

人麻呂の歌学を考える上でもう一つ見逃し難いのは推敲の問題である。周知のように人麻呂作品には「一云」「或云」とか「或本歌」などと記された異伝が多い。この異伝は人麻呂作品が伝誦されてゆくうちに生じたとする見解が一昔前までは一般的であり、現在でも支持者はあるが、そしてそうしたものも全くないとは言えないにしても、近時の研究では人麻呂が初案に手を加え、よりすぐれた作品とする為に推敲したとする考え方が、作品に即した丁寧な分析を経て明らかにされつつある。中には二度以上の発表の場をもつた歌が、その場にふさわしく改変されたものも含むが、これも推敲の一種としてよく、人麻呂がより適切な表現を求めて言葉を磨き、詩の完成に意を注いだことは疑いがない。

すでに和歌を情を抒べるものと自覚し認識していた人麻呂はそれを多くの実作によって裏付けているが、この推敲の問題はいっそう高度な表現効果を求めつつ心魂を傾けて自己を燃焼させ、情を抒べつくそうという文芸意識に裏付けられた行為といへば、同時に嚴

しい批評意識の伴った営為であったというべきであろう。

以上は分類や類聚を通して万葉の歌学がいかなる状態にあったかを見ようとして人麻呂の歌学に及び、人麻呂の和歌に関する自覚・認識の深さを述べつつ、わが国において最初に和歌の本質を見据えた歌人とすることができると言及した。しかし、人麻呂はわずかに正述心緒・寄物陳思の分類の語に自己の和歌観を托し、その作品によって文芸意識や批評意識をのぞかせはするものの、明確な和歌観を吐露した文章を残していない。文章をもって和歌の本質や機能に触れるのは次代をまたねばならなかったのである。その文章とは、いうまでもなく題詞や左注などでまとまった歌論ではないが、次にそれをたどってみよう。

3

人麻呂に続いて和歌を抒情詩として認識し、より明確にその機能を自覚していたのは山上憶良であった。憶良の歌序及び書簡には次のような文章がある。

(1) 令<sub>レ</sub>反<sub>ニ</sub>或情<sub>ニ</sub>歌の序——所以指<sub>ニ</sub>示<sub>ニ</sub>三綱<sub>ニ</sub>更開<sub>ニ</sub>五教<sub>ニ</sub>——遺<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>歌令<sub>レ</sub>反<sub>ニ</sub>其或<sub>ニ</sub>——歌曰

(2) 哀<sub>ニ</sub>世間難<sub>ニ</sub>住歌の序——所以因作<sub>レ</sub>一章之歌<sub>ニ</sub>以撥<sub>ニ</sub>三毛之歎<sub>ニ</sub>——其歌曰

(3) 憶良 誠惶頓首 謹啓(旅人宛書簡)——意内多端 口外難<sub>レ</sub>出 謹以<sub>ニ</sub>三首之鄙歌<sub>ニ</sub> 欲<sub>レ</sub>写<sub>ニ</sub>五藏之鬱結<sub>ニ</sub>——其歌曰

(1)(2)は神亀五年(七二六)七月二一日、嘉摩郡において撰定したと左注に記す、いわゆる嘉摩三部作の二つである。この三部作は惑・愛・老の三つの苦しみを主題としたものである。(1)は感情をもった倍

俗先生と称する人を儒教道徳によって翻意させるために作ったと序にあるが、作品は三綱五教なる道徳でかたくなに教諭するという生硬さはなく、憶良自身の人生の惑を底に秘めつつ共感的に歌ったものであって序にいう政教的動機を越えた人間的な悲しみの漂う歌であるが、そのことは別として、ここで歌学的に大切なのは、和歌が教諭の具となる機能を持つものとする自覚が注目に価するのである。教諭を目的とする歌は前例がなく、後にも家持がこれを模倣した「教諭史生尾張少咋歌」(18・四〇六)があるのみという特殊性をもつが、かかる認識はおそらく毛詩大序の、

故<sub>ニ</sub>正<sub>ニ</sub>得失<sub>ニ</sub>——動<sub>ニ</sub>天地<sub>ニ</sub>——感<sub>ニ</sub>鬼神<sub>ニ</sub>——莫<sub>レ</sub>近<sub>ニ</sub>於詩<sub>ニ</sub>——先王是<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>夫婦<sub>ニ</sub>——成<sub>ニ</sub>孝敬<sub>ニ</sub>——厚<sub>ニ</sub>人倫<sub>ニ</sub>——美<sub>ニ</sub>教化<sub>ニ</sub>——移<sub>ニ</sub>風俗<sub>ニ</sub>——

の詩論を学ぶことによつて得た和歌観であり、これを作品によつて実践してみせたところに中国詩論摂取の深まりを見るべきであろう。中国には古くから文学のジャンルとして自分または他人を戒めするための韻文である箴があり、『文心雕龍』には銘箴の一章があつて、その歴史と作文上の要諦が記されており、『贊』に「箴、惟徳、軌」ともある。また『文選』第五六には「箴」の部立があつて張茂先の「女史箴一首」を収めている。あるいはこれらも念頭にあつたかもしれない。いずれにしても憶良は人麻呂の和歌観より広く歌を捉えていたことは間違いない、これを理論化すれば、毛詩大序から詩品序を経て古今集真名序に至り「動<sub>ニ</sub>天地<sub>ニ</sub>——感<sub>ニ</sub>鬼神<sub>ニ</sub>——化<sub>ニ</sub>人倫<sub>ニ</sub>——和<sub>ニ</sub>夫婦<sub>ニ</sub>——莫<sub>レ</sub>宜<sub>ニ</sub>於和歌<sub>ニ</sub>」と述べられる和歌の効用論に結びついてゆく性質のものであることは疑いがなく、

(2)は老苦をテーマにした歌の序であるが、人生における集まり易く排い難い八大辛苦と遂げ難く尽き易い賞楽を歎き、その老いの歎

きを一章の歌を作つて撥おうというのである。歌自体はその歎きを撥おうといいながら、むしろ歎きの淵に沈淪する形で歌われている、序との矛盾が言われるが、伊藤氏が「憶良において『歎くこと』それ自体も『抒情』であつたと理解することによって解決されるのではなからうか」とされるのが正しいであろう。この点では(3)の場合も同様である。(3)は大伴旅人の松浦川に遊ぶ歌と序に対して、一緒に遊樂できなかった不満(五蔵之鬱結)を三首の歌を詠むことによつて写(除)こうというのである。ともに歌によつて嘆きや不満を撥い写こうという点で一致する。すなわち歌を詠むことは憶良にとつて人生の憂愁や心のわだかまり(鬱結)を写くものであり(カタルシス)、それが和歌の本質であり機能であるとする明確な自覚が述べられているのである。如上の本質や機能に関する自覚はすでに人麻呂によつても認められたことであるが、人麻呂にはかくのごとく言辞に出して述べたものはない。ここに両者の差が見られるのであつて、さきの(1)の効用論的和歌観とともに憶良における歌学の進展を見て取ることができよう。

かかる認識はもちろん作歌体験を通して体得していったものであろう。が、より直接には中国の詩論に学んだものと見るべく、体験から得たものを詩論を媒介として確認したものと解すべきであろう。周知のことながら、毛詩大序には、

詩者志之所<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>也。在<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>志、発<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>詩。情動<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>中<sub>一</sub>、而形<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>。言<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>足。故<sub>ニ</sub>嗟<sub>レ</sub>嘆<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。嗟<sub>ニ</sub>嘆<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>足。故<sub>ニ</sub>永<sub>レ</sub>歌<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。

とあり、心中の志を言葉に表わしたものが詩であるとする中国における伝統的な詩歌観が述べられており、『文心雕龍』明詩の章にもこ

れを引き「在<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>志、発<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>詩」とある。そして『詩品』の序では四季折々の自然風物が詩的感興を呼び起すものであることや人間生活のさまざまな状況や経験をあけて、

凡<sub>ソ</sub>斯<sub>レ</sub>種<sub>レ</sub>種<sub>レ</sub>、感<sub>ニ</sub>蕩<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>靈<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>陳<sub>レ</sub>詩<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>展<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>義<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>歌<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>聘<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>情<sub>一</sub>。故<sub>ニ</sub>曰<sub>レ</sub>、詩<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>群<sub>一</sub>、可<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>怨<sub>一</sub>。使<sub>ニ</sub>窮<sub>レ</sub>賤<sub>一</sub>、易<sub>ニ</sub>安<sub>一</sub>、幽<sub>レ</sub>居<sub>一</sub>、靡<sub>レ</sub>悶<sub>レ</sub>者<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>尚<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>詩<sub>一</sub>矣。

と詩の機能・効用を述べている。この、詩によつて貧窮の心を慰め、幽居の煩悶をなからしめるのに詩にまさるものはないというくだりは憶良の和歌観ともっともよく符合する。もとよりかかる考え方はこの文章で『論語』の貨陽篇「詩可以興、可以觀、可以群、可以怨」を引いているように、また嵇康の「琴賦」(文選)にも音楽に關してではあるが類似の考えが述べられていることからすれば、鍾嶸の時代では詩の機能・効用として常識化していたのであろうが、これだけはっきり言っている個所は毛詩大序にも文心雕龍の明詩にもない。従つて憶良のこの和歌観の原拠は詩品序にあるのではないかということをおぼせられるのである。

人麻呂に季節分類や寄物による歌集編纂があつたように、憶良についても『類聚歌林』の編纂があること、人麻呂に推敵があつたように憶良にも、さきの(2)の歌に明らかに推敵と考えられる異伝があり、ほかに巻八の七夕歌(三三〇・三三一)にもその跡が見えることなどもまた、人麻呂の場合と同様に憶良の和歌に対する批評精神や歌学をうかがわせる。類聚歌林は現存しないので、その形態や編纂目的に種々の論が提出されているが、いずれにしても「類聚」なる語には吉永登氏の言われるように、『芸文類聚』とか『類聚古集』を連想させるものがあり、この類聚は「恐らく漢学に深い憶良は支那詩

学の立場にたつて分類を試みたのではないかと思ふ<sup>(注23)</sup>ということになろう。伊藤氏もこの類聚について、「人麻呂歌集も、常体・詩体ともどもに内容は類聚歌集で、そのありようが人麻呂における文学の自覚、和歌の認識と相関関係をなしていたのであった。まして憶良は、人麻呂と違って、『類聚』の名を表にかざしたのである。」とし

つつ、「この相違にも『人麻呂における和歌意識』と『憶良における歌論意識』との違いが、象徴的に語り告げられているように思われる<sup>(注24)</sup>。」と述べておられる。この指摘は上述の和歌の機能・効用への認識の深まりとも考え合わせて首肯できるところである。

憶良の周辺にも憶良とはほぼ同様に、和歌は心中の志を述べ、人生の嘆きや鬱情を撥うものとする意識をもつ歌人はあった。たとえば、巻五梅花の歌三二首の序で（筆者は旅人・憶良・大宰府の某官人など諸説があつて定まらない。憶良であれば当然だが）、梅花の雅宴の楽しさを言いつつ、「若非<sup>三</sup>翰苑<sup>一</sup>、何以<sup>三</sup>摠<sup>情</sup>」と述べていることなどがそれに該当する。したがって当時、かかる和歌観は憶良を中心としてその周辺に、ほぼ通念となつていたことを思わせるものである。

4

この憶良の歌論意識を継承し、理論的にも実作上にもいっそう自覚的に認識を深めていったのが大伴家持である。家持が和歌に人生上のさまざまな憂いや悲しみ、あるいは苦悩などを払い除き、慰める働きをはじめて自覚したのは、早く天平十一年（739）、二三歳頃のことであつたと思われる。この年家持は亡妻を悲傷する歌（3・四三<sup>一</sup>四三）を作っている。一連は書持との贈答に端を発して、季節の推移と無常感とを軸に、次々と歌いながら悲しみを抒べて行くの

であるが、最後に「悲緒未<sup>レ</sup>息、更作歌五首」を据えて全篇をしめくくるのである。この題詞は和歌によつて「悲緒」が終熄するまで歌い継ごうという考えのあつたことをよく物語るものである。果して五首の最後の歌は、悲緒からの解放を思わせる次の一首で結ばれている。

昔こそ外にも見しか吾妹子が奥津城と思へば愛しき佐保山

(四七)

私は以前この歌群を考察した際、この一首について『愛しき佐保山』の結びは、佐保山を妹の鎮まる地としてなつかしいものとして見るまで心の余裕の生じてきていることを物語り、ここに至つて作者の心も読者の心も悲哀から解放され救われるのである<sup>(注25)</sup>。」と述べたことがある。そのごとく心緒を抒べ尽くすことこそ和歌の本質であり機能であると家持は若くして思っていたのである。

それから二年後、家持は久迩京から弟の書持に贈った歌（17・完

二）の題詞で、

橙橋初咲霍公鳥翻喫、対<sup>三</sup>此時候<sup>一</sup>詎不<sup>レ</sup>暢<sup>志</sup>、因作<sup>三</sup>三首短歌<sup>一</sup>

以散<sup>三</sup>鬱結之緒<sup>一</sup>耳

と明瞭に述べているのも、上述の和歌に歌する認識を強く裏付けるものである。

家持は生まれながらにして物に感じ易く、孤独感の深い感傷的性情をもった人物であつたらしい。この世を無常と観ずることも、この時代、とくに父旅人や憶良など家持の周辺に広く行きわたつた思想であつた。若くして父を失い、またさきの妻の死にも会い、「うつせみの世は常なしと知るものを」（3・四六）とも歌う家持であつた。加えて時代の背景には貴族間の激しい政争にあけくれる天平

の憂鬱ともいべき状況がある。資質的に政治家というより詩人でありながらも、名門大伴家の嫡男として官界に立たねばならぬ家持にとつて心中の葛藤や鬱結は、生得の性格に加えていっそう増幅されていったことが考えられる。

家持には鬱屈した微妙な心情を表わすにふさわしい「いぶせし」と歌った歌が五首も数えられる（万葉の全用例は一〇首）。また、「心慰さに」と歌った人は家持のほかはいない（五例）。ほかに「思ひのべ」も家持の二例のみ（「心のべ」は他に一例ある）、気持や心を「なぐ」と歌った例も格別に多い（「なぐ」の用例九例中七例が家持）。そしてその鬱屈を払うために心を多く自然の風物に向けて歌を詠むのである。したがってさきに人麻呂について述べた際引用した文心雕龍・物色の章ならびに詩品序の詩論をもっとも強く、身をもって受け止めていたのが家持であったと思われる。その発露が前引した天平十三年の「橙橋初咲云々」の題詞であり、その反映が「心慰さに」「思ひのべ」「なぐ」などの言葉となつて表現されているのだといえる。

季節の風物に寄せて抒情する歌は家持のもっとも早い時期から認められ、彼の和歌の主要な分野を占めるが、天平八年（三七〇）の「秋歌四首」（八・一五〇〜一五三）は最初の連作として注目され、同十五年の「秋歌三首」（八・一五七〜一五九）の左注には「見物色作」の左注まで伴う。この物色なる語はほかに家持の一例（20・四八四左注）と家持と交わした池主の書簡にしか見られぬものであって、これが文心雕龍の章名として存在することや文選の賦に一類のあることから考えても、中国詩論といかに深く結び合つて作歌していたかが知られるであらう。

天平十九年春、重患の後、下僚池主と交わした文章中にも彼らの

和歌認識をよく伝えるものがある。

巧遣<sub>三</sub>愁人之重患<sub>一</sub> 能除<sub>三</sub>恋者之積思<sub>一</sub>（池主）

一看<sub>三</sub>玉藻<sub>一</sub>稍写<sub>三</sub>鬱結<sub>一</sub> 二吟<sub>三</sub>秀句<sub>一</sub>已調<sub>三</sub>愁緒<sub>一</sub>（家持）

のごとき文章がそれである。これらも物色を媒介として述べられた歌に付されている。

こうした家持の歌論の至りついた境地を見せるものに卷十九の卷末を飾る天平勝宝五年（七五三）二月の三首があり、その左注の言葉がある。

二十三日に、興に依りて作る歌二首

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影に鶯鳴くも（四三六）

わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕へかも（四三六）

二十五日に作る歌一首

うらうらに照れる春日にひばりあがり心悲しもひとりし思へば（四三六）

春日遅々、鶴鶴正啼。悽惻之意、非<sub>レ</sub>歌難<sub>レ</sub>撥耳。仍作<sub>三</sub>此歌<sub>一</sub>、式展<sub>三</sub>締緒<sub>一</sub>。（以下略す）

従来この三首は一括して論じられるのが普通であったが、最近中西進氏は、はじめの二首と最後の一首とを区別して考えるべきことをいい、二十五日の歌は二十三日の歌の「感懐をもう一度今度は漢籍を翻案する形でくり返したとおぼしい」と述べている。<sup>(注26)</sup>左注の「春日云々」の二句が毛詩（小雅「出車」）によることはあまねく知られており、これが最後の歌だけに直接相わたる点からも正しいと思われる。だとすれば二十三日の歌境を自覚的に漢詩の知識と詩論によつて捉え直し、再構成したのが二十五日の歌といえる。従つて

左注は後者のみにかかるものとなるが、目指した世界は共通すると  
してよいであろう。

この三首の表現がいかに自覚的であったものであるかについては伊藤氏の論に詳述されているが、そのごとく家持独自の洗練された言語感覚によって選抜された新鮮な美しい言葉をもって奥深い人生の孤独感を平明に歌い上げている。それはそのまま家持の美意識・歌学の実践であって、左注の和歌観とも融即しつつ果されているところに、彼の歌学が単なる中国詩論の借り物でなく、すでに確乎として血肉化していたことを示すのである。「悽惻之意」を「非レ歌難レ撥耳」と述べなくてはならなかったところに、家持が歌を「生」と等価のものと見なしていた自覚ないし認識の深さを見るのである。

5

家持が万葉集全体の編纂に大きくかかわっていることも上述の和歌観と無縁であるはずがない。人麻呂歌集には多分なかったと思われる「譬喩歌」の分類を部立として巻三に設けたのは家持の仕業としてよく、表現上の三分類を完成している点やさきに述べた巻八・十の四季分類も仮りに家持としてよいならば（周辺の人物であったとしてもそれほど変らない）、人麻呂や憶良と比べても、より広く完成に近い歌論をもっていたことを裏付けるであろう。渡瀬昌忠氏によれば家持にも季節歌集があり、巻八に埋没したことを考証している。<sup>(注28)</sup>  
もう一つ家持における歌学の存在をはっきり印象づけるのは、巻二十防人歌の拙劣歌排除の問題がある。拙劣歌は進上歌の半数にも及ぶ厳しいもので、その基準がどこにあったかは諸説あるが、これ

も巻十九末尾の和歌観と表裏をなすものであったと考えられる。防人の為に悲別の情を陳べた長歌を三首までも作っている家持であってみれば、おそらく締緒が適切な表現で抒べられた歌を好しとしたと考えて大きく誤るまい。こう見てくるとわれわれは、やはり古今集序の歌論で重要な部分をなす、詞と心と体（さま）を得た歌を理想とする歌論に近い意識をすでに十分持っていたと思わざるを得ない。巻十九末尾三首の実作に見せた磨き抜かれた作品もこのことを告げるものであろう。

家持の抱いていた和歌の本質観・効用観と併せてこれを考えると、それらはいずれも論の形はなさず、片鱗をうかがわせるに過ぎないものの、ここまで至れば、次代古今集序で結実する歌論は、すでに手の届くところにあったといっても過言であるまい。（55・11・10）

注1 尾山篤二郎「万葉集編纂の目的の一私案」（『芸林』九巻六〇九号）、

伊藤博『万葉集の表現と方法上』

2 山田孝雄『万葉集考證』

3 中西進『万葉集の比較文学的研究』

4 小島憲之「万葉集と漢文学」（『上代文学—研究と資料—』慶応義塾大学国文学研究会編）

5 中西光風『上世歌学の研究』

6 小沢正夫『古代歌学の形成』、興膳宏『文学論集』（中国文明選13、詩品序の見解）

7 注3に同じ。

8 太田青丘『日本歌学と中国詩学』

9 注1の伊藤『前掲書』

10 『詩品』のわが国への伝来時期は不明だが、伊藤氏はこのことによつて人麻呂時代すでに伝来していたと見ておられるのであること、直接伺っている。

11 拙稿『万葉宮廷歌人の研究』

- 12 伊藤博『前掲書』  
 13 山田孝雄『日本歌学の源流』  
 14 石井庄司「雑歌・四季雑歌論」(『万葉集講座』第六卷、春陽堂、のち『古典考究万葉篇』)  
 15 武田祐吉『国文学研究柿本人麻呂攷』  
 16 渡瀬昌忠『柿本人麻呂研究歌集篇上』  
 17 高橋和巳「潘岳論」(『中国文学報』第七冊、一九五七・一〇)  
 18 注16に同じ。  
 19 注8に同じ。  
 20 宮崎晴美「万葉集の雑歌」(『万葉集大成7』)  
 21 伊藤博『万葉集の表現と方法下』  
 22 吉永登「類聚歌林の形態について」(『万葉』第二十一号)

- 23 久松潜一『日本歌論史の研究』  
 24 注21に同じ。  
 25 拙稿「大伴家持」(古代文学会編『万葉の歌人たち』)  
 26 中西進『万葉の時代と風土』  
 27 注21に同じ。  
 28 注16に同じ。

(追記)

従来、万葉の歌学は歌学史的には比較的なおざりにされていた分野であった。これを初めて本格的に正面から論じたのは、本稿でもしばしば引用した伊藤博氏の諸論である。小稿は多くの部分をそれらに負っているものであるが、詳細は直接ついで見られたい。伊藤氏にお礼を申し、おことわりとしたい。